

現代日本語「まずまず」の諸用法と基盤的意味

Modern Japanese *Mazu-mazu* several users and basic meanings

原 美築
Hara Mizuki

摘要

This paper take up various usage in modern Japanese *Mazu-mazu*. And I will try to explain it.

From the viewpoint of syntax, we can divide the usage of modern Japanese *Mazu-mazu* into four. The first one is to modify the whole sentence (A usage). The second is a usage that *Mazu-mazu* works as a predicate (B usage). The third is a usage modifying a noun (C usage). The fourth is a usage modifying the predicate (D usage).

"*Mazu-mazu*" of A usage is used in two meanings. One is "to indicate that the matter described in subsequent section is taken over with priority". The other is "to indicate that the matter to be described in subsequent section is certain". The former is an emphasis expression of the adverb *Mazu*. The mark of "sequence" of *Mazu* also exists in *Mazu-mazu*. Therefore, it can express "taking precedence". The latter *Mazu-mazu* has become slightly dilute in the meaning of "sequence" and it has become meaningful to show "indicate the thing that can be judged as the most reasonable (high certainty)". In other words, first, *Mazu-mazu* of A usage is based on "sequence", has a meaning to take up events of the later sentence as a priority, and the interpretation of "validity" is added to it. As a result, "*Mazu-mazu*" has made it possible to show that the content of subsequent sections is high in certainty.

"*Mazu-mazu*" of B usage and C usage is to evaluate that speakers have a high degree of content for topics. For example, "physical condition is *Mazu-mazu*" and "showed a *Mazu-mazu* play" indicate that "physical condition" and "play" are good enough for the speaker to convince. It seems that "*Mazu-mazu*" of D usage plays a role of somewhat suppressing the degree of the word to be modified. For example, when saying "It was *Mazu-mazu* interesting", it seems that it is lowering the level of interest rather than saying "It was interesting." For that, *Mazu-mazu* of B usage and C usage has a positive meaning, *Mazu-mazu* of D usage seems to have a negative meaning. However, these are not inconsistent. Because *Mazu-mazu* is based on the meaning of "validity". B usage, C usage, D usage are all "levels that the speaker considers to be reasonable".

Therefore, it can be concluded that modern Japanese *Mazu-mazu* has a role to show "validity" of the topic of speakers in all usage.

キーワード まずまず 妥当性 序列性 程度 評価

1. はじめに

現代語の「まずまず」には、(1)(2)のように文全体を修飾し、後件の内容の確実性が高いことを示す用法と、(3)のように自らが述語となったり、(4)(5)のように修飾語となったりすることで、話者が提起している事柄の程度を高（大）とする用法が見られる（以下、用例の下線は全て筆者による）。

(1) 天引き生活はいよいよ楽につづけられることになってきた。これでまずまず私も一家も一ト安心というわけである。

（本多 静六『私の財産告白』より）

(2) 三角縁神獣鏡の出土する古墳は、まずまず、四世紀の古墳とみてよい。

（安本 美典『最新「邪馬台国」論争』より）

(3) 今日はお天気もまずまずで、ツーリング日和です。

（Yahoo!ブログ）

(4) 守備に関しては、誰もがまずまずのプレーを見せていた。

（オグ・マンディーノ(著)/坂本 貢一(訳)『十二番目の天使』より）

(5)まずまず便利な立地の小さなみすぼらしいホテルでも一泊四〇元した。

（ジョー・シャーロン(著)/田中 昌太郎(訳)『上海の紅い死』より）

このように複数の用法を持ち、文の構成要素としても様々な役割を取り得る「まずまず」だが、その用法間の関わりや、文法的機能、意味特徴などを記述している研究はほとんど見られない¹。そこで、本稿では現代語「まずまず」のそれぞれの用法を取り上げ、その機能について説明を試みる。

「まずまず」の機能を説明するにあたって、まず次節では「まずまず」の種々の用法の分布について概観する。次に第3節では、文全体にかかる用法について、意味解釈の面から「まずまず」が持つ基盤的な意義について示唆を与える。第4節では程度を高（大）と評価する用法について、修飾語の種類による分類から詳細な考察を試みる。第5節では各用法間の連続性について、時代ごとの用例数の推移から分析を加える。そして、第6節において現代語「まずまず」が持つ基盤的な意味が「妥当性」にあることを記述する。

2. 現代語「まずまず」の種々の用法

本節では、現代語「まずまず」の使用実態を明らかにするため、現代日本語書き言葉均衡コーパスにおける「まずまず」の全用例について、用法ごとに分類した結果²を示す。本稿では、以下のように、統語的な観点から四分類を施す。また、複数の解釈を可能とする用例については、別に分類する。

A：文全体にかかる用法…用例(1)・(2)

B：述語として機能する用法…用例(3)

C：連体修飾格「の」を伴い、名詞を修飾する用法…用例(4)

D：述部を修飾する用法…用例(5)

E：複数の解釈が可能な用例

表1 「まずまず」の用法分類

	A	B	C	D	E	不明	合計
用例数	18	114	95	51	12	2	292
割合	6.2%	39.0%	32.5%	17.5%	4.1%	0.7%	100.0%

表1より、現代語「まずまず」の用例について、文全体にかかる用法は全体の6%余りに過ぎず、大半が述語として機能したり、特定の語を修飾したりする用法で用いられていることが分かる。ただし、複数の解釈が可能な用例も12例ある。これらは各用法間に共通する「まずまず」の機能を探るヒントとなる可能性が高い。以下に、Eに分類した用例を示す。

- (6) 会津は自分たちから手出しはすまいと誓ってくれたので、まずまず役目は果たしたが、薩摩の出兵拒否をひっこめさせることについては、もうどうなるものでもなかった。
(古川 薫『勝海舟』)
- (7) それに加えて、当時の満州国内の事情は比較的平穏と申しますか、まずまず安定したものでした。
(村上 春樹『村上春樹全作品 1990～2000』)
- (8) 尤もいずれも速成であるが、まずまず文部省の規定の教授法等は一般へ習わせる事が出来たのである。
(内藤 鳴雪『鳴雪自叙伝』)
- (9) 昨年は個人消費が経済の足を引っ張りましたが、ことしはまずまず政府の計画どおり個人所得も伸びるのではないか、
(国会会議議事録)

(6)～(9)はそれぞれ後件の文全体にかかり、話者の認識判断として、述語の事柄・内容に対する確実性を示す役割をしている(A用法)と解釈することもできれば、「果たした」、「安定した」、「出来た」、「伸びる」といった述語自体を修飾して、その程度の高さを示す役割をしている(D用法)と解釈することもできる。特に動詞を伴う述部にかかる場合は、上記で記した統語的な分類について複数の解釈が可能となるものが比較的多く出てくる。

それでは、なぜ上記で挙げた用例のような解釈があいまいになる用例が存在するのだろうか。次節以降で、A～D分類のそれぞれの用例について詳しく見ていく。

3. 文全体にかかる用法

本節では、文全体にかかる用法(以下、「A用法」と示す)の用例について検討していく。現代語のA用法における用例を意味の面から検討すると、次の2種類に大別できる。

〈A-1〉他に考えられることはあるが、後続節で述べる事柄が優先的に想起されるという話

者の認識判断を示すもの

〈A-2〉後続節で述べる事柄が确实（非常に高い確率）であるという話者の認識判断を示すもの

以下に、それぞれの用例を挙げる。まず、〈A-1〉である。

(10)天引き生活はいよいよ楽につづけられることになってきた。これでまずまず私も一家も一ト安心というわけである。

（(1)再掲）〈A-1〉

(11)「お屋敷さま、これはご懐妊のしるしでござりますぞ。まずまず…おめでたい」すでに欲するいのちは胎内に芽生えていた。

（山岡 荘八『徳川家康』）〈A-1〉

(12)山ひとつ越えた北側の、阿仁の出身である。「まずまず、あがってください。くたびれたんすべ。あ、今足を洗う桶を持ってきますから」

（西木 正明『養安先生、呼ばれ！』）〈A-1〉

(10)、(11)は、先行文脈の事態を受けて、様々な言いたいことや思いはあるものの、その中で最も優先的に考えられることを「まずまず」を用いて示していると考えられる。(12)については、相手に対して様々なもてなしをする予定でいるが、その中でも優先的に考えられる事柄（「あがってください」）を挙げている。

次に〈A-2〉を見てみよう。

(13)三角縁神獣鏡の出土する古墳は、まずまず、四世紀の古墳とみてよい。

（(2)再掲）〈A-2〉

(14)それゆえ町の模様などはまずまず西洋むきと相見え申し候。ずいぶん見物いたし候ところもこれあり、

（池辺 一郎『池辺三山』）〈A-2〉

(15)お金を預かって高収益を确实にやりますというのは極めて困難でまずまずできない。こんなことができますというのは詐欺に等しいと私は言った

（国会会議議事録）〈A-2〉

(13)~(15)はいずれも「まずまず」に後接する「四半世紀の古墳とみてよい」、「西洋むきと相見え申し候」、「できない」という判断について、それが确实性の高いものであることを示している。

また、以下の(16)~(18)に見られるような、想定される数ある事柄の中で優先的にそれが考えられることを示すもの〈A-1〉とも、後件の内容について确实性が高いことを示す用法〈A-2〉とも取れる用例もある。

(16)そのほかの特徴をあげてみると一。 にんじんの面相は、まずまず、人にいい感じをもたせるようにできていない。

（ジュール・ルナール(著)/岸田 国土(訳)『にんじん』）

(17) テスリンリバーは、支流でありますのでまずまず日本の川くらいのイメージで考えていただいでよろしいのですが、

(夢枕 獏『空気枕ぶく先生太平記』)

(18) 経済見通しで申し上げましたように、5%ないし6%の成長はまずまず実現できるであろう、こういうふうに見ておるわけであります。

(国会会議議事録)

このような、現代語のA用法における用例全18例のうち〈A-1〉・〈A-2〉の分類があいまいなものは、7例に及ぶ³。その理由としては、〈A-1〉と〈A-2〉は両者とも、「まずまず」が基盤として持つ意義を引き継いでいるからだ⁴と考える。〈A-1〉の「他に考えられることはあるが、後続節で述べる事柄が優先的に想起されることを示す」という解釈は、序列が想定される複数の事柄のうち、筆頭の項目として話すにふさわしいという話者の見方から成り立つ。これは、複数の事柄から序列の筆頭を選択する場合の「妥当性」を示すものである。一方の〈A-2〉の「後続節で述べる事柄が确实（非常に高い確率である）ことを示す」という解釈は、後続節で述べる事柄が話者にとって、最も適切であるという認識により成り立つ。換言すれば、話者による後続節の事柄に対する判断の「妥当性」が〈A-2〉の解釈を支えている。話者が聞き手に伝えようとする事柄が複数想定されるか唯一的かの違いで〈A-1〉、〈A-2〉の意味解釈は大別できるが、「まずまず」は共通して、話者の「（「まずまず」の後続節で示す内容が、相手に伝えるべき事柄として）妥当である」という「妥当性」を示す意味的な特質を持っていると言える。(16)～(18)のように、分類があいまいな用例が見られるのは、「話者が聞き手に伝えようとしている事柄が複数想定されるかどうか」が先行文脈から明確には判断できないからであるわけだが、「まずまず」を、後続節の内容に対する話者の「妥当だとする事柄」として捉えれば、解釈上、大きなズレは生じない。

4. 程度を高（大）と評価する用法

本節では、程度を高（大）と評価する用法の用例について検討していく。程度を高（大）と評価する用法の中には、述語として働く用法（以下、「B用法」）、連体修飾格「の」を伴って名詞を修飾する用法（以下、「C用法」）、述部にかかる用法（以下、「D用法」）の3つに分けられるが、これらはいずれも文中の要素の程度を示す点で共通であるため、「程度を高（大）と評価する用法」として一括りにして述べていく。

4. 1. B用法の特徴

現代語の「まずまず」の用例の中で、最も用例数が多いのが、「まずまず」自らが述語として機能するB用法である。以下に用例を挙げる。

(19) 今日はお天気もまずまずで、ツーリング日和です。

((3)再掲)

(20)体調のほうはちょっと倦怠感はあるもののまずまずです。

(Yahoo!ブログ)

(21)電池の積載量や短期間であったと思われる点からいえば、性能はまずまずであろう。この突然の発表は、トヨタの度肝を抜いたようである。

(『電気自動車の時代』)

(22)ロチャを失ったことを別にすれば、状況はまずまずだった。弾薬さえあまり消費していない。

(トム・克蘭シー(著)/井坂 清(訳)『いま、そこにある危機』)

(19)は「天気」、(20)は「体調」、(21)は「性能」、(22)は「状況」について、それぞれその良し悪しの程度(評価)を、「まずまず」で表している。いずれも、前後の文脈からどちらかというところ肯定的に捉えられる程度(評価)を示していると言える。しかし、(20)では「倦怠感はあるものの」というネガティブな評価が、(21)・(22)では「電池の積載量や短期間であったと思われる点からいえば」、「ロチャを失ったことを別にすれば」といった条件が示されている。ここから、「まずまず」は話者が示す事柄の程度が「非常に良い」場合は用いられず、何かしらの条件がある中で、「とりあえずは良い」といった判断がされる場合に、述語として用いられるものと考えられる⁴。これはA用法で確認した「妥当性」との関連が深いと考えられる(第5節参照)。

4. 2. C用法の特徴

連体修飾格を伴って名詞を修飾するタイプのC用法は、現代語の「まずまず」の用例のうち、2番目に用例数が多い。以下に用例を挙げる。

(23)守備に関しては、誰もがまずまずのプレーを見せていた。

((4)再掲)

(24)そういった方々に対する基礎年金、年金の額としてはまずまずの金額ではなかろうかというふう思うわけでございます。

(国会会議議事録)

(25)三人の老兵相手の交渉は、まずまずの成功だったと、我ながらにデュマは思う。

(佐藤 賢一『別冊文藝春秋』)

(26)気温も低く少し寂しい雰囲気ですが、空には青空が広がり始め、まずまずの登山日和です。

(Yahoo!ブログ)

(23)は「プレー」、(24)は「年金の金額」、(25)は「交渉の成功具合」、(26)は「登山日の天気」について、それぞれ良し悪しの程度(評価)を「まずまず」で表している。B用法の「まずまず」が述語として働いていたのに対し、C用法の「まずまず」は修飾語として働いているという統語的な機能の差はあるものの、意味の面では両者はほぼ同じ働きをしている。それは、(24)で「そういった方々に対する基礎年金、年金の額としては」という条件が示されていたり、(26)で「気温も低く少し寂しい雰囲気ですが」というネガティブな評価が前件でなされていたりすることからも読み取れる。

意味の面でB用法との差を認めるとするならば、C用法においては(37)の「成功」、(38)の「登

山日和」など、「まずまず」がなくとも「良い程度（評価）」を表す語への修飾が見られるという点である。「まずまず」が良い程度（評価）を表す意味を持つとするならば、元から程度（評価）が高いことを示す語を修飾する場合、意味が二重になり不自然に感じられてしまうはずである。しかし、(25)、(26)のように、程度（評価）が高いことが認められる語を修飾する用例も少なくない⁵。

4. 3. D用法の特徴

述部を修飾するタイプのD用法も、B用法やC用法ほどではないが、現代語「まずまず」の用例として多く見られるものである。以下に用例を挙げる。

(27)価格の改定により、まずまず便利な立地の小さなみすぼらしいホテルでも一泊四〇元した。

(5)再掲

(28)音が静かで印刷結果もまずまずきれいである。

(木村 泉『ワープロ徹底入門』)

(29)一時的に預金離れ現象に手を焼くことがあっても、S & Lの経営はまずまず順調とってよかった。

(宮崎 義一『複合不況』)

(30)まあ、絶賛するほどでもないが、まずまず面白かった。

(Yahoo!ブログ)

(27)は「立地の便利さ」、(28)は「印刷結果」、(29)は「経営状況」、(30)は「映像作品」について、それぞれ被修飾語の程度（評価）を限定する形で「まずまず」が使用されている。発話者が話題としている事柄について、その程度（評価）を示すために「まずまず」が使用されているという点では、B用法やC用法と役割が似通っているともいえるが、「まずまず」自体が持つ働きを見ると、B用法やC用法と異なって見える点もある。

(27)~(30)は、いずれも元から程度（評価）が高い語を修飾しており、「まずまず」はその被修飾語の程度（評価）をやや抑えているように感じられるのである。例えば、(28)であれば「印刷結果もきれいである」という表現と比較して考えると、「印刷結果もまずまずきれいである」は、その「きれいさ」が完全なものではなく、理想的な状態よりはやや劣ることを感じさせる。(30)では、「絶賛するほどでもないが」という前置きがあることから分かるように、「面白かった」とするのに対し、「まずまず面白かった」とすることで、その面白さのレベルをやや下げているように見える。D用法の用例は、いずれの場合も被修飾語の程度をやや抑える役割として「まずまず」が用いられているのだと言える。

すると、「まずまず」は、自らが述部となるB用法の場合は、自らが「高程度（高評価）」を表す指標となり、述語を修飾するD用法の場合は、被修飾語の高程度性（高評価性）を「低める」指標となるという、二面性を持つ語であるようにも見える。しかし、筆者はB用法・C用法・D用法いずれにおいても、「まずまず」は共通した意味機能を持つものだと考える。

4. 4. 程度を高（大）と評価する用法「まずまず」の持つ意味機能

本項では4.1から4.3.を踏まえて、程度を高(大)と評価する用法における「まずまず」の意味機能を考察する。B用法・C用法の「まずまず」は、話者が話題としている事柄に対して、どちらかといえば肯定的な程度(評価)を示し、D用法の「まずまず」は被修飾語の程度(評価)をやや抑えるような働きをすることを確認した。同じ「まずまず」を用いる場合であっても、B用法・C用法とD用法で、意味的な機能に違いがあるように見える(「まずまず」が高い程度(評価)の明示に使われる場合と、程度を低める修飾語として使われる場合がある)のはなぜなのだろうか。筆者はその理由を、第3節で取り上げた「妥当性」が「まずまず」の意味的な基盤をなすためだと考える。

「まずまず」が文全体にかかるA用法について述べた第3節では、話者の「(「まずまず」の後続節で示す内容が、相手に伝えるべき事柄として)妥当である」という判断を示す標識として「まずまず」があると述べた。その標識がB～D用法においても当てはまると考える。B～D用法の場合は、A用法の「話者が妥当だとする判断」が「話者が妥当だと考えるレベル」となるのだと考えると分かりやすい。4.1.から4.3.で取り上げた用例を再度見てみよう。

(31)体調のほうはちょっと倦怠感はあるもののまずまずです。

((20)再掲)〈B用法〉

(32)ロチャを失ったことを別にすれば、状況はまずまずだった。弾薬さえあまり消費していない。

((22)再掲)〈B用法〉

(33)そういった方々に対する基礎年金、年金の額としてはまずまずの金額ではなかろうかというふうに思うわけでございます。

((24)再掲)〈C用法〉

(34)三人の老兵相手の交渉は、まずまずの成功だったと、我ながらにデュマは思う。

((25)再掲)〈C用法〉

(35)一時的に預金離れ現象に手を焼くことがあっても、S & Lの経営はまずまず順調といってよかった。

((29)再掲)〈D用法〉

(36)まあ、絶賛するほどでもないが、まずまず面白かった。

((30)再掲)〈D用法〉

B用法の(31)の場合は、完全な健康体でないにせよ、「発話者が納得できるレベルの体調」であることを「まずまず」で示している。同じく(32)は、「ロチャを失った」という憂慮すべき事柄があるにせよ、「全体としては想定していた納得のできる程度」であることを「まずまず」で表している。この「納得感」は、「話者が妥当だと考えるレベル」に通じるだろう。

C用法の(33)についても、「全員が手放しで喜べるほどではないが、納得できる程度にはある」という意味合いで「まずまずの金額」が提示されており、(34)の場合も、自らの交渉について、完璧な成功とまでは言えずとも、発話者の中で「想定した程度の成果が得られた」ことを「まずまずの成功」としているのだと言える。

一見、被修飾語の程度(評価)を低めている働きをしているように見えるD用法においても、(35)は、発話者の「そのような評価を下しても妥当と思えるほどに順調である」という判断を示す指標として見ることができる。また(36)は、期待を大きく上回る絶賛ではないものの、「発話

者が期待する一定の水準に該当するレベルには達している」として捉えられる。よって、D用法においても、B用法・C用法に同じく「話者にとって妥当であるかどうか」が「まずまず」で示されていると考えることができる。かかり先が高程度性（高評価性）を伴う場合、「まずまず」はその度合いを低める働きをしているのではなく、「話者が期待する一定の範囲において最も妥当である」ことを示していると捉えられるのである。

以上より、程度（評価）を表す「まずまず」の用法においては、統語的な役割や係り先の修飾語の種類の種類に問わず、「話者が（一定の条件下で最も）妥当だと考える程度」を示す機能があると考えられる。

5. 用法間の関わり

前節までに、各用法における用例を共時態で確認することで、「まずまず」の持つ意義を探ってきた。しかし、近世以前にB～D用法が見られないこと、現代語においても用例の出現率に偏りがあること（第2節参照）など、「まずまず」について記述する上で説明すべき課題は多く残っている。そこで、本節では、近代以前の用例を取り上げ、時代ごとの用例数の推移を見ることによって、「まずまず」の現代日本語における用法間の関係を考察する。

5. 1. 用例数の推移

本項では、「まずまず」の用例を時代ごとに、A～D用法に分類した結果を示す（A用法については、〈A-1〉、〈A-2〉、その他の3項目の分類も施す）。近世以前の用例は「Japan Knowledge Lib」を用い『新編古典文学全集』を対象としたものを、近代の用例は「日本語歴史コーパス（CHJ）」を用い検索対象を「明治・大正」としたものと、「CD-ROM版 新潮文庫の100冊」から検索したものを、現代語の用例は「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」から得られたものをそれぞれ採集した。結果は以下の表2の通りである。

表2 用例数の推移（網掛けは用例が1例も見られないもの）

	〈A-1〉	〈A-2〉	A あいまい	B用法	C用法	D用法	E	不明	合計
古典文学 全集	29	0	0	0	0	0	1	0	30
	96.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	3.3%	0.0%	100.0%
近代語 コーパス	19	13	3	0	1	0	6	1	43
	44.2%	30.2%	7.0%	0.0%	2.3%	0.0%	14.0%	2.3%	100.0%
新潮の 百冊	10	10	2	4	5	3	0	1	34
	29.4%	29.4%	5.9%	11.8%	14.7%	8.8%	0.0%	2.9%	100.0%
現代 日本語	5	6	7	114	95	51	12	2	292
	1.7%	2.1%	2.4%	39.0%	32.5%	17.5%	4.1%	0.7%	100.0%

表2より、近世以前の用例はほとんどが〈A-1〉の用法であり、程度を高（大）と評価する用法はほぼ見られないことが分かる。しかし、近代コーパスの結果を見ると、A用法の中でも「後続節で述べる事柄が確実（非常に高い確率である）ことを示す」意味解釈が可能なくA

ー 2) の用法が増え、連体修飾格「の」を介して名詞を修飾する C 用法も出現する。B 用法と D 用法の確例はまだ見られないが、解釈によっては「程度を高(大)と評価する用法」ともとれる E (分類があいまいなもの) に数えられる用例も増えてくる。昭和期の作品も収めた「新潮の百冊」になると、全ての用法が見られるようになる。しかし、用例数の出現率としては依然として A 用法が高く、程度を高(大)と評価する用法が多く使われるようになったのは現代になってからであることが読み取れる。次節から、時代ごとに用例を詳しく見ていく。

5. 2. 近世以前の用例

近世以前の様相を概観するために、新編日本古典文学全集(小学館)のデータを「Japan Knowledge Lib」で検索したところ、「まづまづ」の用例は全 30 例であり、そのほとんどが A 用法の〈A-1〉に分類される用例であった。しかし、そのうち 21 例が『謡曲集』からの用例であり、資料による偏りが大きい。また、下記で見るように、『謡曲集』以外の資料であっても、「まづまづ」が使われているのは会話文中であることから、書き言葉としては使用頻度が低かったことがうかがえる。

(37) 呼びおろして臥したるに、「まづまづ」と呼ばるれば、冬の夜など引きさがし引きさがしのぼりぬるがいとわびしきなり。

(『枕草子』)〈A-1〉

(38) 中納言の、涼「御伝へはしも、げに必ずさるべきことならむ。これはわざとならずともあへなむ。まづまづ、顔いと醜し。心劣りしたまひなむ」

(『宇津保物語』)〈A-1〉

(39) これなる御内が熊野の御入り候ふ所にてありげに候。まづまづ案内を申さばやと思ひ候。

(『謡曲集』)〈A-1〉

(40) 五郎「それがしが事は御機嫌いかが計りがたく候ふ間、まづまづ参り候ふまじ。シテ「ただそれがしに御任せあつて急いで御参り候へ。」

(『謡曲集』)〈A-1〉

(41) わが国は天地開闢よりこの方、まづ以て神国たり。されば仏法今に盛んなり。まづまづ間近き比叡山、あれこそ日本の天台山候ふよ。

(『謡曲集』)

(37) は相手に対してすぐに行動を起こすように促すような呼びかけとして用いられており、(38) では相手に伝えるべき様々な事柄のうちの筆頭として述べる内容に対して「まづまづ」が付されている。(39)、(40) は後件の内容について、数ある事柄の中で優先的に後続の事態(「案内を申す」や「参り候ふまじ」)を行うことを示していると考えられる。

ここから、近世以前においては、「まづまづ」は主に話し言葉として、「想定される数ある事柄のうち、最も優先されるべき事柄を挙げる場合」に用いられたと言えるだろう。ただし、(41) においては、係り先が「間近き」ともとれるため、「D: 述部にかかる用法」としての解釈も可能ではある。A 用法とその他の用法の中間的な用例として考えられ得る用例である。

5. 3. 明治・大正期の用例

「日本語歴史コーパス(CHJ)」より、明治・大正期に時代を絞り「マズマズ」で用例を検

索すると、全 43 例の結果を得た⁶。近世以前の用例に比べると、様々な用法が見られる。

(42) 友達が其處で癒つたと云ふので、大變信用して居るので、病は氣のもの、先づ先づ當人の意志に任せることにした。

(『太陽』) 〈A-1〉

(43) 手に餘る程の勢力をば、堂々と振り廻し來る日に於ては、之れを穩かに抱き込む事は、先づ先づ難儀の事と謂はざる可からず、

(『国民之友』) 〈A-2〉

(44) それから、夜具蒲團類は晴天の日は必ず、日光にさらすのです、如斯すれば先づ先づ充分であります

(『太陽』) 〈A-2〉

(45) 迎心とは彼の事は如何なるべき此の事は如何にすべきと先々の事を徒らに苦にする事也

(『太陽』) 〈C用法〉

(46) 重傷ながらも案外経過が良く、二週間も立つと、ズツト快く成つて、先づ先づ一同安神をしたが、何にしる司令官が重傷と來ては一時は大騒動であつた。

(『太陽』) 〈E用法〉

(47) でもまあ父様の御機嫌が殊の外だからこれでまづまづ天下泰平、それに母様がゐらして以來、精神上の苦勞は別として私の日課が半分以上減つたの

(『女学世界』) 〈E用法〉

(42)は、考えられる方法が複数ある中で、「意志に任せる」ことが妥当だとすることを、(43)(44)はそれぞれ「難儀の事と謂はざる可からず」、「充分であります」が話者の妥当性が高い判断として読み取ることができる。第3節で見た現代語における〈A-1〉、〈A-2〉の用例と同じように解釈が可能である。

用例数は少ないながらも(45)にあるC用法も見られた。後文脈に「徒らに苦にする事也」とあるため、4.3.で見たような明確な高程度性（高評価性）は読み取りづらいが、「話者が妥当だと思うレベルの（難しさを伴う）事」と読み取れば、現代語に見られる「まずまず」のC用法と同じように考えることが可能である。

また、(46)、(47)のようなA用法ともD用法とも取れる用例も複数見られる。(46)は「一同安神（本文ママ「安心」か）をした」という話者の妥当だと考える判断を示しているとも、「安神（安心）」のレベルが「話者の納得できる程度である」という高程度（高評価）を示しているとも読み取れる。(47)も同様に、「天下泰平（である）」ということが、話者の妥当とする判断（A用法）とも取れば、「天下泰平」の程度が「話者が納得できるほど高い」という解釈もできる。A用法とD用法は文中における「まずまず」の出現位置が重なるため、複数の意味解釈ができる用例が出てくるのだろう。

5. 4. 「新潮の百冊」による用例

「新潮の百冊」を対象に、近現代の文学作品を検索した結果、「まずまず」で32例、「まづまづ」で2例の用例を得た。「新潮の百冊」においてもA用法の用例が依然として多いが、前節で見たC用法に加え、B用法とD用法の確例も複数出てくる。

(48)勘九郎、その流説、根も葉もない。いずれゆるりと言いきかせるによって、まずまずこの場は堪忍せい。

(司馬遼太郎『国盗り物語』〈A-1〉)

(49)つねにたがいに臨戦状態にある舅と婿とが、一ツやねの下で対面するなどは、まずまず考えられぬことだった。

(司馬遼太郎『国盗り物語』〈A-2〉)

(50)潜水眼鏡式の紫外線よけの眼鏡は、まずまずだった。ときおりすき間から粉雪が入りこむ以外には、大した支障はなかった。

(新田次郎『孤高の人』〈B用法〉)

(51)観客席にはまだ空席もあったが、それでも八分くらいは埋まっていた。タイトルマッチでもない興行としてはまずまずの入りようだった。

(沢木耕太郎『一瞬の夏』〈C用法〉)

(52)あの相撲を嫌って逃げまわっていた大飯食らいの怪童は、その麓で育った蔵王山の名を名乗って以来まずまず順調に番づけ面をあがっていたのである。

(北杜夫『楡家の人びと』〈D用法〉)

程度を高(大)と評価する用法としてまとめられる(50)~(52)を見ると、いずれも「紫外線除けの眼鏡」や「客の入り」、「相撲の番づけ(の上がり方)」について、「まずまず」によって「話者が妥当だと思える高いレベル」であることが示されている。用例数の出現率に差はあるものの、B・C・D用法がいずれも近代期に出現していることが確認できる。

5. 「まずまず」の用法獲得過程

5.1.から5.4.より、近世以前の「まずまず」は「他に考えられることはあるが、後続節で述べる事柄が優先的に想起されることを示すもの〈A-1〉」としてのみ用いられていたが、近代(明治・大正期)に入ると「後続節で述べる事柄が确实(非常に高い確率である)ことを示すもの〈A-2〉」としての意味も担えるようになり、さらに文中の名詞(C用法)や述語(D用法)にかかっていると解釈が可能な用例が見られるなど統語的な機能も拡大したことが読み取れる。この変化の内実は、大きく〈A-1〉から〈A-2〉への意味的な解釈の拡大と、「程度を高(大)と評価する用法(B~D用法)」の獲得という二点に整理できる。本節ではこの二点に注目し、考察を加える。

A用法における「まずまず」は、副詞「まず」を強調した表現であると考えられる。副詞「まず」には、「物事の初め」という「序列性」の標識として使われることから⁷、A用法として用いられる「まずまず」にも、この「序列性」が存在していると思われる。例えば、5.2.で挙げた(37)の呼びかけの「まづまづ」などは、相手に行動を促す表現であるが、これは「まず初めに行動せよ」といった物事の優先順位の最上位を示す表現だと言える。(38)においても、言いたいことが複数あるうちの「最初の項目」として「まづまづ」を使いながら発話していると考えられる。このように「序列性」としての機能を持つ「まずまず」が、様々な文脈で用いられるうちに、明確な順位付けが希薄になり、「他の事柄よりも優先して」といった意味合いに加えて「様々な考えられる事柄のうち、最も妥当であると判断できる事柄を選択して示す」といった〈A-2〉に見られる「話者の判断を示す意味機能」も持つようになったのではないかと考えられる。つ

まり、A用法における「まずまず」は初め、「序列性」を基盤として使用されていたが、多様な文脈で用いられるにつれ、そこに内包される「妥当性」が基盤となって、後続節の内容の確実さを示す表現〈A-2〉用法が可能になったと言える。

程度を高（大）と評価する用法は、本稿の概観の限り、明治・大正期において、まずC用法が表れる。しかし、調査対象を拡大したより精緻な調査の余地も大きく、また、5.3.で見たように、述語にかかる用法（D用法）とも解釈が可能な、分類があいまいな用例が複数見られることから、C用法とD用法の出現時期の前後関係は確定的ではない。A用法とD用法は「まずまず」がいずれも文頭もしくは述語の前に現れる。文中位置が重なるため、統語的な連続性が強いと言える。A用法（話者の判断の妥当性）として使われていた「まずまず」が、「（後続節で述べる事柄について）話者が妥当と判断するレベル」としても容認可能となり、D用法につながったのではないかという推測も可能である。一方、「まずまず」が、文中の名詞の前に現れた場合、その「妥当性」が、後続する名詞のレベルの高評価と解釈されれば、C用法の派生にもつながりうる。程度を高（大）と評価する用法の中でも、B用法は昭和以降にしか現れないが、これはA・C・D用法の「まずまず」が修飾語として何らかの要素にかかっているのに対し、B用法においてのみ、「まずまず」が自ら述語としての意味を持つという統語的な差から説明が可能であるし、用法の獲得が最も遅かったことも肯きやすい。

副詞「まず」との関連性も含め、歴史的な観点からの説明には、分析・考察の余地が残されるが、「まずまず」の用法獲得過程について、下記の流れがあったと仮定できる。

- ① 「序列性」を基盤とした〈A-1〉用法として使用される（近代以前）。
- ② ①に内包される「妥当性」が基盤となって〈A-2〉用法を獲得する。
- ③ 事柄の程度（評価）について修飾するC、D用法が見られるようになる。
- ④ C、D用法が使用される中で、「まずまず」の語自体に程度性（評価性）が生まれ、自らが述語となるB用法を獲得する。

6. まとめ —現代語の「まずまず」が基盤として持つ意味—

第2節では、現代語「まずまず」の用例を用法ごとに分類し、その分布を概観した。そして、第3節・第4節では、一つ一つの用法を取り上げ、意味的な特徴や被修飾語との関連も加味しながら「まずまず」が独自に持つ特質を探求していき、第5節で補足的に用法間の関わりと時代による使用例の変遷について触れた。

その結果、A用法においては、「まず」の原義である「序列性」から、これに内包される「様々考えられる事柄のうち、最も妥当であると判断できる事柄を選択して示す」といった「妥当性」に基盤が移り、後件の出来事を優先して取り上げたり、後件の内容の確実性の高さを示したりする表現が可能になったという見方を示した。さらに、「話者の判断の妥当性」から「話者の判断による物事の程度の妥当性」が示せるようになり、B～Dの用法が表れ始めたことについて示唆した。いずれの用法も、「妥当性」が「まずまず」の機能に大きく関わりを持っており、程度を高（大）と評価する用法においても、単純に程度の高低を限定しているのではなく、「発話者が妥当とするレベルや期待値に即していること」を表していることを示した。そのため、発話者の期待を大きく上回るような程度（評価）や、逆に発話者が想定した水準に達しない事柄については「まずまず」は用いられにくいように思われる。

(53)??子どものころから夢見た大きな目標をまずまず叶えた。(作例)

(54)??新商品を売り出したが、まずまずの儲けにしかならなかった。(作例)

また、第5節でA用法の意味的な用法の拡大を説明する際に「序列性」から「妥当性」へと解釈が広がる流れについて述べたが、程度を高(大)と評価する用法に対しても同じことが言えると考える。以下の用例を参考にされたい。

(55)時間の都合上、この日はここで退散。まずまずの滑り出しか・・・?

(Yahoo!ブログ)

(56)苦悩のシーズンが続いたが、さすがはオリンピックイヤー、今季はまずまずの滑り出し。

(TVぴあ関東版, 関西版, 東海版, 北海道・青森版, 福岡・山口版)

(57)演出などが自ずと目に入るわけですけど、今回はまずまずの出だしといってもいいんじゃないでしょうか。

(Yahoo!ブログ)

(58)全国的に激しい渋滞はみられず、各社とも「まずまずの出足」と評価した。(毎日新聞)

(Yahoo!ブログ)

(55)~(58)を見ると、主にC用法において物事の「初め」を表す語を修飾する用例が複数見られることが分かる。一方で、例えば「まずまずの折り返し」や「まずまずのラストスパート」など、物事の中盤から終盤を想起させる語と共起する用例は見られない。このことから、程度を高(大)と評価する用法についても、「まずまず」の単独形式「まず」が持つ「物事の初め」という「序列性」が生きていると考えられる⁸。物事がある程度進み、熟考を重ねた結果の評価ではなく、発話者が「とりあえずこの程度であろう」と想定した範囲にあるかどうかを「その他諸々考えられることは別として、現段階で最も妥当な判断」として示すのが「まずまず」が基盤として持つ意味として考えられる。

注

- 『現代副詞用法辞典』における「まずまず」の項目では、「程度を高(大)と評価する用法」について「不完全ながら評価できる様子を表す。ややプラスイメージの語」であり、「積極的な賞賛や評価をはばかりというニュアンスで、許容の暗示が強い」と説明されている。しかし、「後件の内容の確実性が高いことを示す用法」との関連は記述されておらず、文法的な機能の多様性についても言及がない。また、川端(2012)は、「程度評価用語・尺度感覚を表す語彙群」の一語として「まずまず」を数えているが、「自己基準や常識的基準自体を示すタイプ」であるとの見方を述べるのみで、語自体の特質については言及していない。
- 検索アプリケーションは「中納言」および「少納言」を利用した。
- 〈A-1〉の確例は5例、〈A-2〉の確例は6例であった。
- ネガティブな評価や条件が示されていない(19)における「まずまず」も、筆者の内省では「文句の付けどころのない最高評価」とは受け取りにくいと感じる。明らかなマイナス評価や条件がなくとも、述語として働く「まずまず」は「良いと判断できるが最高ではない」程度を表すものと考えられる。
- C用法に見られる、程度(評価)の高さをうかがわず被修飾語としては、「成功」「登山日和」の他に「上柄」、「高い関心」、「チャンス」、「健闘」、「活躍」、「好評」、「リード」の全9例が

確認された。

- 6 検索結果は全52例であったが、「先々代」や「先々月」など「マズマズ」の用例として不適なもの除いた。
- 7 『日本国語大辞典』の「まず」の項目に「(1)他のもの、他の事態より先んずるさまを表す語。最初に。まっさきに。いちはやく。」とある。
- 8 この「序列性」から「妥当性」への連続性をより詳しく説明していくために、畳語形式でない「まず」との関連を含めた考察を今後の課題としたい。

参考（引用）文献

- 川端元子「程度副詞を分類する視点の考察」『愛知工業大学研究報告』第四十七巻、百十五～百二十四頁、2012年。
- 北原保雄『日本国語大辞典 第二版』、小学館、2003年。
- 飛田良文・浅田秀子『現代副詞用法辞典』、東京堂出版、1994年。

例文出典

- ・国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj）
（検索システム『少納言』・『中納言』）
- ・国立国語研究所『歴史コーパス』（pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj）
（検索システム『中納言』）
- ・JapanKnowledge Lib (<http://japanknowledge.com.ejgw.nul.nagoya-u.ac.jp/library/>)
- ・CD-ROM版 新潮文庫の100冊

【収録作品】

『羅生門／鼻』、『小さき者へ／生れ出づる悩み』、『山本五十六』、『砂の女』、『華岡青洲の妻』、『女社長に乾杯!』、『青春の蹉跎』、『焼跡のイエス／処女懐胎』、『黒い雨』、『野菊の墓』、『歌行燈／高野聖』、『あすなろ物語』、『一握の砂／悲しき玩具』、『ブンとフン』、『風に吹かれて』、『剣客商売』、『沈黙』、『野火』、『死者の奢り／飼育』、『雪国』、『檸檬』、『パニック／裸の王様』、『楡家の人びと』、『聖少女』、『モオツァルト／無常という事』、『一瞬の夏』、『小僧の神様／城の崎にて』、『破戒』、『国盗り物語』、『コンスタンティノーブルの陥落』、『新橋烏森口青春篇』、『太郎物語』、『痴人の愛』、『人間失格』、『ビルマの堅琴』、『新源氏物語』、『冬の旅』、『二十歳の原点』、『二十四の瞳』、『エディプスの恋人』、『こころ』、『李陵／山月記』、『孤高の人』、『アメリカひじき／火垂るの墓』、『放浪記』、『にぎりえ／たけくらべ』、『草の花』、『若き数学者のアメリカ』、『風立ちぬ／美しい村』、『人民は弱し官吏は強し』、『点と線』、『銀河鉄道の夜』、『金閣寺』、『人生論ノート』、『忍ぶ川』、『雁の寺／越前竹人形』、『塩狩峠』、『錦繡』、『友情』、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』、『山椒大夫／高瀬舟』、『路傍の石』、『さぶ』、『遠野物語』、『砂の上の植物群』、『戦艦武蔵』、『花埋み』、『絵のない絵本』、『人形の家』、『十五少年漂流記』、『O・ヘンリ短編集』、『変身』、『異邦人』、『ティファニーで朝食を』、『沈黙の春』、『若きウェルテルの悩み』、『悲しみよ こんにちは』、『ハムレット』、『狭き門』、『長距離走者の孤独』、『古代への情熱』、『ジーキル博士とハイド氏』、『赤と黒』、『怒りの葡萄』、『桜の園／三人姉妹』、『はつ恋』、『クリスマス・カロール』、『罪と罰』、『アンナ・カレーニナ』、『シャーロック・ホームズの冒険』、『トム・ソーヤーの冒険』、『チップス先生さようなら』、『嵐が丘』、『グレート・ギャツビー』、『車輪の下』、『黒猫／黄金虫』、『トニオ・クレゲル／ヴェニスに死す』、『女の一生』、『赤毛のアン』、『月と六ペンス』

